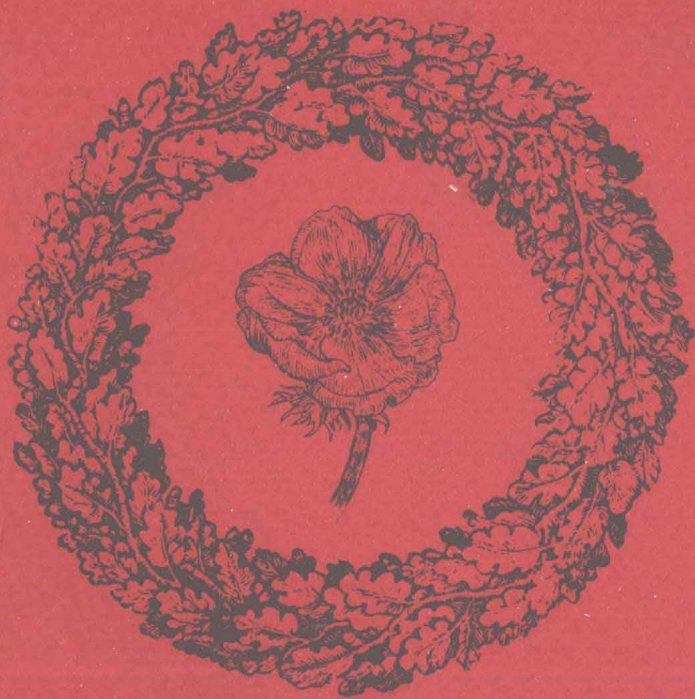


Angélique





26

アンジェリカ

新しき門出《下》

S&A・ゴロン
井上一夫訳

講談社

LA VICTOIRE D'ANGELIQUE
by Serge & Anne Golon,
Copyright ©1989 by INTERNATIONAL
BOOK PROMOTION-PARIS,
This book is published in Japan,
by Kodansha *publishers* Ltd.,
by arrangement with INTERNATIONAL
BOOK PROMOTION,
through Japan UNI Agency, Inc.

アンジェリク26

新しき門出(下)

© KAZUO INOUE 1991



1991年8月30日 第1刷発行

定価 1200円 (本体 1165円)

著 者 S & A ・ ゴ ロ ン
訳 者 井 上 一 夫
発行者 野 間 佐 和 子
発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2丁目12-21

郵便番号 112

電話 出版部03-5395-3505

販売部03-5395-3622

製作部03-5395-3615

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
製本所 株式会社 堅 省 堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてをお願いいたします。

Printed in Japan

ISBN4-06-116996-3 (文2)

目次

第九部 大天使の旅

37	ヴェルサイユの小姓	11
38	ケベックの恐怖	17
39	ケベックの変貌	23
40	教母の幻	25
41	穴熊狩り	27
42	モンリアルの修道院長	30
43	いとこマリー・アンジュ	38
44	生き返った魔女	43
45	無残な死体	60

第十部 白い砂漠

46 ウォパッソーの孤独 69

47 ひと筋の煙 73

48 放浪のベンガシ一家 79

49 ウォパッソーの馬 90

50 意地悪い自然 94

51 吹雪の夜の訪問者 97

52 絶望と希望 106

第十二部 孤独の筏

53 雪原の箱船 117

54 へら鹿 125

第三部 オランダの息吹

55 神父の回想 139

56 湖岸の出会い 150

57 イロコイ族の拷問 154

58 白銀の湖の貴婦人 159

59 戦士の恥 163

60 イエズス会とマルタの騎士 170

61 冬の太陽 177

62 グロリアンドウル 187

63 地の病 189

64 伝道所の客 191

65 小砦の火 198

66 ニューフランスの嵐
203

第十三部 告白

67 法衣のオージュヴァル
209

68 ヴェルサイユの夢
216

第十四部 冬の終わり

69 雪どけ
223

70 早春の病
230

71 救いと悪息
234

72 殉教
238

73 貝ビーズの小枝
251

74 大天使の放浪
259

75

天使とオノ
リーヌ

267

装幀・装画 村上 昂
レイアウト 小高辰也

アン
ジ
ェ
リ
ク
26

新しき門出
(下)

第九部

大天使の旅

37 ヴェルサイユの小姓

大天使は国王の控えの間から魔女のうしろを歩いて
いた。

壁掛け風のカーテンをめくると、二、三步で渡り切
れる狭い通路の入口が現れる。年代記にもマントノン
夫人のサロンからビリヤード室に通じるこの渡り廊下
のことが出ている。

ルイ十四世は毎晩のようにこのビリヤード室にかよ
って、ゲームにふけていたといわれる。

小姓がひとり、国王の先に立ってこのカーテンをめ
くり、裾をおさえていた。金襴の衣裳に身を飾った貴
婦人たちがつづく。その貴婦人のひとりが、顔を上げ
た。

金色の目と小姓のエメラルド色の目が合った。そし
て宮殿のこの迷路のような暗がりのなかに、アメリカ
大陸の人里離れた土地の塩の匂い、天日に乾した鱈の
鼻をつくような匂いが流れこんだように思われた。鉾

を打ちこまれた死体の前で、「ザリル！ ザリル！
死なないで」と泣きながら跪いていた女の姿が浮かび
上がる……

「たしかにあの女だ、まちがいない」ペイラック伯の
次男カントーは考えた。

すぐに、そばにいた従僕にルイ金貨を一枚握らせて
尋ねる。

「いまはいつていったご婦人の名前は？」

従僕は知らなかった。だが、転がりこんできた金貨
にすっかり喜んで、一分もたたないうちにもどつてく
ると、すでにビリヤード台と国王を囲んでいる人の輪
にもぐりこんできて、気前のいい美少年小姓の耳もと
で囁いた。

「ゴレスト夫人ですよ」

「ご主人は何ものなんだい？ ご主人の肩書きは？」

小姓に二枚目の金貨を渡して尋ねた。

今度は従僕は一時も燭台持ちの持場に帰らなかつ
た。持場を離れば叱られるのはわかっていたが、こ
の若い貴族の使いをしてかせぐお宝にくらべたら、大
したことはないという計算だ。

従僕は国王のゲームがおわる前にもどつてきて、カ
ントーの耳に聞きこんできたことすべてを囁いた。

問題の貴婦人はヌヴェール県執政官の奥方で、県執政官は陛下に呼び出されて出仕したばかりだという。

こんどはもっと重要な地位につくという噂だった。夫人は身分も高いし慎重深い女性で、マントノン夫人に氣にいられ、その取巻きのなかにはいっている。貴婦人たちにとって、マントノン夫人の取巻きになるのは、太陽王と身近に接するいちばん早道なのだった。

そのあとでカントーは、ゴレスタ殿がカナダ総督に任命され、夫婦揃ってル・アーヴルから任地に向かう準備中だということも聞きこんだ。

しかも翌日、ゴレスタ殿と結婚したのが新大陸の東海岸に力を持っていたニコラ・パリー老人の末亡人だということまで突きとめることができた。

すべての話が符合する。

カントーはすぐに新大陸に渡らなければならないと思ったが、そのためには旅費を工面しなければならないかった。ことの重大さはよくわかつている。一日も、いや一時間も無駄にはできない。

カントーは愛人のショーマ夫人のところへ行った。

夫人はこの若い恋人が二日前から姿を見せないのでもんでいたのだった。カントーは、急にニューフランスに帰らなければならないといって、理由も説明せずに二万リーブルの旅費が必要だという。

ショーマ夫人はこの世がふたつに裂けたような氣がした。思わず鋭い声を立ててしまひ、その声が自分の耳にとどくと、さすがに恥しくなった。悲しみにくれ、激しい欲望に身を焦がしながらも、その声はまるで獲物を捕えそなたの獣の吠える声に似ていると思つたのだ。

「いや、だめ！ いやよ、わたしを捨ててはだめ……」

カントーはあきれたように夫人をながめた。「奥方、永遠につづくものなんて、何ひとつないのをご存知ないんですか？ だからこそ、美しい果実を差し出されたら、それを摘みとって味わわなければならないですよ……わたしをベッドに迎えてくださったとき、あなたにもそれはわかつていたはずですよ。この世に永遠なんてものはないんです……とにかくわたしは行かなければならない」

ショーマ夫人は、この美青年が裏街道をひとりで馬を走らせているところを思い描いた。そして、追剥ぎに出あつたり、河に落ちたり……

「それに、ああ、海がある……」夫人はうめいた。

カントーは笑った。

「海ですって？ 別にどうということはありませんよ。もちろん何週間も波にゆられて不快な日を送らな

ければならないけど、乗りこんだ船に運をまかせ、夢を見たり鼻唄を歌ったりしてればいいんですよ。ただ忍耐の問題です」

シヨヌ夫人はカントーの輝くような若さを見てみると、自分も同じ年ごろに人生をいろいろ楽しんでこなかったことを後悔した。

「あなたの話してたお友だちのところへ帰るの？　ほら、森の小さな動物たちのところに？」

カントーは眉をひそめた。暗い影がその顔をよぎる。

「あいつにまた会えるかどうか……」

「その動物に呼ばれたのではないの？」

「さあ……」

「急に帰ったりして、陛下のご不興をかうようなことはないかしら……」

「兄のフロリモンが取りなしてくれます」

言葉をかわしながら、シヨヌ夫人は金庫や小箱をあけ、カントーがさし出す革袋にルイ金貨を注ぎこんでいた。枚数など算えようともしない。

「やっぱりあなたひとりを行かせたくないわ」

「奥方、あなたにはお勤めがあるでしょう」

「それにしても、何があったの？　アメリカのご家族に危険なことでも？」

「もっと悪いことです」

シヨヌ夫人はカントーの肩に顔を埋めて、その肩を涙で濡らした。

「ねえ、せめて教えて、あなたは何と戦おうというの？」

「悪です」

カントーは立ち上がった。夫人は身を離れたが、カントーの姿はもう涙にかすんで見えない。この青年をいつまでも待つことになるだろう。そのしぐさ、たまにしか見せない笑顔、そして「永遠につづくものなんて何ひとつない」という分別臭い言葉を思い出しながら……

「ありがとう。祈ってください。わたしのために祈ってください」カントーはいつて、戸口に走りかけた。

「いや、そんな風に行ってしまうなんて……さよならもいわずに……」

カントーははっとしてかけもどると、夫人を抱きしめた。青年の接吻を受けながら、夫人は考えた。この若ものは男なのだ。幼いころ、こんな人にめぐり合いたいと夢見ていたような男性なのだ。毎日こういう人と暮らせたらと、夢に見ていたのに……

「待って、いいこと思いついたわ。イヤリングのダイヤと真珠のネックレスはお金にかえられるわ」

カントーの手にイヤリングとネックレースをのせ、まるでそれがこの若者に託す自分の哀れな心だというように、手のなかに包みこませた。カントーは自分の手を握るやさしい手に口づけした。

「ありがとう。お金はできるだけ早く返すよう兄にいつておきます」

夫人は涙もかれて、うめくようにいった。

「いいのよ、全部とっておいて……わたしのささやかな分身が、あなたといっしょにいられるんですもの」カントーははじめてこの家を訪れたときのように、夫人の膝に身を投げかけて抱きついた。

「やさしい奥方、神の祝福がありますように」

腰にまわされた若い腕と下腹に押しつけられた額の思ひ出は、彼女は生涯忘れないだろう。

死ぬときも、それを心の支えにするかもしれないし、これだけは生涯でただひとつの宝なのだ。辛さに取乱しながらも、心に誓う。これこそ、わたしのただひとつの愛の支えなのだ。

ペイラック伯爵の次男カントーは、カナダ総督の一行を追ってノルマンディーの港ル・アーブル・ド・グラーズに着いた。ニューフランスの新総督と奥方の一行を乗せた船は、すでに二日前に出港していた。こう

なつては、その船が英仏海峡で嵐にあつて、ガスコニュ湾あたりまで流されてしまうことを祈るしかない。総督一行が遅れば、その間にカントーは別の船をさがして先まわりできるかもしれない。

だが、船をさがすのも容易ではないことがわかった。季節漁師の大小の船団もニューフランスへの郵便や乗客を乗せた商船団も、もう揃つて出港したあとだ。今年最初の船団は、ほぼ同じ日に港を出ている。

カントーはやつと、出航間際に修理箇所が見つかつて港に足止めされていた小型船を一隻見つけることができた。小さなぼろ船だったが、船長はセント・ローレンス河に直行するつもりだということで、カントーはたつぷり金を払って乗せてもらふことにした。カントーも航海や船のことは経験から心得ているので、乗組員の数は少なくても、陸より海にいることのほうが多い水夫たちが乗りこんだぼろ船が、二十五門の大砲を載せた三層デッキの大型船を軽く追いこしてしまうことはわかつていた。

カントーはまた、水夫たちの人相を見て、こんなやつらに金貨を見せては、身ぐるみはいで殺されかねないと思つた。

案の定、海に出て二日目の夜、カントーの寝ている汚い船室に人影がふたつ忍びこんできて、ベッドに横